ザ・研修 日本の知見を世界へ 7

日本の農業をアフリカで生かす

風土に合った米の栽培が進められているアフリカ諸国から、
農業政策や農業振興策を学ぶために、若い農業人材が訪れています。

JICA北陸	研修コース アフリカ／農村振興コース	受託機関 NPO法人 グリーンツーリズムとやま

富山県朝日町で、刈り取った稲を天日干しにする作業を手伝う。

大型のコンバインで稲刈りを体験した。

稲の品種改良の講義を行った折谷さんのご自宅前で。

ため池を見学し、水源を確保する方法などを学んだ。

参加国：カメルーン、エチオピア、ガンビア、リベリア、ナイジェリア、シエラレオネ、スーダン、タンザニア、ウガンダ、ザンビア、ジンバブエ。

水が豊かな米どころの富山県で、生産から加工、流通など農業の現場を視察し、米作りを行うアフリカの国々で生かすための青年研修「農村振興コース」が行われた。期間は約2週間。稲刈りの時期に合わせ、アフリカ11か国から農業行政や農業普及に携わる若手リーダー14人が参加した。

まず研修員たちが訪れたのは、近代的な大規模農業が営まれている地域。整備された田んぼや用水路などに驚きながらも、「いつかは自分たちの国でもこんな農業を実現したい」という声が聞かれた。農業共同組合では、農家同士が協力し合う、生活向上にも寄与する仕組みを学んだ。農家に技術指導などを行う農業普及員の方々との交流では、農家との信頼関係の築き方、新しい農業技術を広める方などを熱心に聞いていた。

また、生産だけでなく、流通や加工についても学んだ。米粉でパンを作って販売を行う米作農家では、農産物に付加価値を付けて販売する6次産業化の取り組みを見て、工夫を重ねる生産者の熱意を感じた。山あいの小規模な農家では伝統的な農業を体験。昔使っていた農機具などの使い方を教わった。

研修員たちはここで得た知識のもと、帰国後にできること、取り組みたいことなどを心に強く描いていた。

■JICAの研修とは：途上国の多様な分野の中核を担う人々を招き、各国が必要とする知識や技術を学んでもらうもの。日本で行うものと日本以外の国で行うものとがある。

この研修で学べること

米の品種改良について学ぶ

アフリカの農家では、自家調達している種籾の品質劣化が問題になっている。そこで、アフリカでの栽培に適した種籾の品種改良に取り組む富山植物資源研究所を訪問。所長の折谷隆志さんは「アフリカといっても気候風土は地域によってかなり違うので、いろいろな種類の種籾を開発する必要があります」と語る。お昼は、折谷さんが手がけた新品種のお米を2種類炊いて食べ比べ。味の違いを実感した。

折谷さんが品種改良した複数の品種を実験的に育てている田んぼを見学。

試食したお米はアフリカ用水陸ハイブリット稲E111。カレーライスでいただいた。

地域の人たちから学ぶ

富山県東部では、小規模農家を訪れて小型の機械や人の手を使った農業を見学した。研修員たちは、昔の人が使っていた脱穀機や手動で籾とごみなどを選別するトウミなどにも興味津々。「これなら、すぐに農業の現場で使えそう」という声もあった。地域の人たちの農作業を手伝い、一緒に餅つきをするなど交流の時間も楽しんだ。

実際にトウミを操作する研修員。

地域の方々と一緒に餅つきを体験。

研修員's Voices

田んぼに放ったアイガモが雑草を食べ、そのフンが肥料になるアイガモ農法には驚きました。無駄のない循環型の農業で、無農薬のお米は高価格で取り引きされる。帰国したら、農家の方々と一緒に挑戦してみます。

ムトゥワラ地区協議会 農業圃場役員
タンザニア
レゴショラ・エドウィン・ムレンゲキさん

研修で印象に残ったことがたくさんありました。なかでも農業の6次産業化は私たちにも取り組めると感じました。家畜のミルクやトマトを使った加工品を考えて、農家の生計向上につなげたいです。

農業省 農業官
ザンビア
ムワンサ・ローレイン・ムウィラさん

コースリーダーの目

近代と伝統、ふたつの農業を学ぶ

NPO法人「グリーンツーリズムとやま」理事長
長崎喜一（ながさき・きいち）さん

元富山県職員で農業土木技師。2004年、自然豊かな懐かしい田舎暮らしの魅力を国内外に向けて発信し、体験してもらうことを目的に「グリーンツーリズムとやま」設立。

人口が増え続けているアフリカでは、農業の生産性を向上させることが求められています。しかし現実には農業の知識や技術、適切な流通の仕組みが広がらず、多くの農家が貧しさから抜け出せません。そこで日本でさまざまな農業振興策を学んでもらおうというのが、この研修の目的です。県の職員として長年農業振興に携わり、そこで得た技術や知識、人のつながりをアフリカの若い人たちの役に立ててもらいたいと考え、研修に取り組んでいます。

1回目の研修では、富山の最新の農業をあれもこれも見てもらおうとかなり詰め込んだプログラムにし、研修員たちがふだん接している農業とはかけ離れてしまいました。そこで翌年からは、小規模農家の米作りや昔の農業機械を使った脱穀体験を取り入れました。とても好評で、なかにはトウミの設計図を持ち帰り、自作したものを写真に撮って送ってくれた研修員もいました。今回の研修でも、「（トウミの）設計図はないんですか」と研修員から聞かれ、日本の伝統的な技術も求められているのだと実感しています。

アフリカでは水不足に悩む国も多いので、水が豊富な富山の整備された水利施設をそのまま持ち帰ることはむずかしいですが、たとえば、ため池を農業に利用する方法は参考になりますし、用水路の水流を使った小水力発電に興味を示した研修員もいました。

日本の伝統的な農業は、研修員にとってすぐに役に立つ学びとなり、近代的な農業は彼らが未来を描くときのひとつの目標になると思います。このふたつを体験できるのが、この研修の意義だと思います。

最近ではメールを使い、帰国後もおたがいの近況を報告し、わからないところをやりとりすることも増えています。研修をきっかけに、富山とアフリカの農業をつなげていきたいと考えています。